

<b>Title</b>	ローザ・パークスの生涯：マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの出会いまで
<b>Author(s)</b>	森田, 美千代
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学, Volume26, 2011.3 : 171-187
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4154">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=4154</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## ローザ・パークスの生涯

——マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの出会いまで——

森 田 美千代

### 一 はじめに

ローザ・パークス (Rosa Parks, 1913-2005、以下パークスと記す) は、モンゴメリー・バス・бойコット運動を始動させた女性である。彼女のその一事は、アメリカの歴史を大きく変える転換点になった。彼女のその一事がなければ、アメリカの歴史は、我々が知っているものとは大きく違った軌跡を描いたに違いない。

パークスの人生は意外に知られていない。特に、日本においてはそうである。本小論においては、パークスがマーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr. 1929-1968) に会会うまでを取り扱うことにする。(キングに出会った後のパークスについては、別に取り扱うことにする)。キングに出会った後のパークスの人生をたどることによってわかることは、育った家庭環境にしても、信仰と教会生活にしても、受けた学校教育にしても、公民権運動への参加のしかたにおいても、両者は意外と異なっていたという事実である。にもかかわらず、パークスのその後の人生 (やパークスの人生全体) から浮かび上がってくるのは、猿谷要が「ローザ・パークスはいつも

キング博士と行動を共にしていたわけではないけれども、その心情は固く結ばれていた」と言うごとく、パークスとキングは、生涯お互いに信頼の気持ちを持ち続けていたという事実である。(この面については、稿を改めて論じることとする)。

一九世紀の四半世紀末頃、アメリカの南部においては、「ジム・クロウ法」によって、輸送機関、学校、病院、食堂、ホテル、劇場その他のいたる所で、黒人は白人から、法的に隔離されるようになった。一八九六年には、「ブレッシー対ファーガソン」最高裁判決において、「分離すれども平等な (separate but equal)」各種の施設をもつことを認める南部の制度が法的に有効になった。教育の領域では、黒人のブラウンがカンザス州タピカ教育委員会を相手どり、公立学校における人種隔離は憲法違反であると訴えた「ブラウン対タピカ教育委員会」裁判で、一九五四年五月、アメリカ合衆国最高裁は、教育上の人種隔離は憲法違反であるとの判決を下した。しかし、他の領域では、黒人は依然として、白人から隔離され続けていた。<sup>②</sup>

また、二〇世紀の初頭頃、アメリカ南部において、クー・クラックス・クランが再出現した。この集団は、南北戦争後に結成され、それから約半世紀後の一九一五年の感謝祭の日に、ジョージア州ストーン・マウンテンで再結成された。パークスは、「六歳になる頃にはわたしは物心がついていて、わたしたちは本当には自由ではないことがわかっていた。クー・クラックス・クランは、黒人の居住区に乗り込んできて、教会を焼き払い、黒人に暴力を振るい、黒人を殺していた」と、述懐している。<sup>③</sup>

パークスを取り巻く、その当時の状況(その一部を示したのであるけれども)は、以上のごときであった。過酷な環境のなかで生きること余儀なくされた。

## 二 ローザ・パークスの生涯

——マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの出会いまで——

### 1 ローザ・パークスが育った家庭

パークスの父は、ジェームズ・マッコーレ (James McCauley) といひ、アラバマ州アベヴィル (Abbeville) 出身で、職業は大工であつた。仕事上、ほとんど家に帰らず、パークスが、五歳頃から成人して結婚するまで、父親に会うことはなかつた。<sup>(4)</sup>

パークスの母は、レオナ・エドワーズ (Leona Edwards) といひ、アラバマ州パイン・レヴェル (Pine Level) 出身だつた。彼女は、アラバマ州セルマにあるペイン大学 (Payne University) に行き、教員免許 (a teaching certificate) を取得し、パイン・レヴェルで教師をしたこともある。(学士号は取得しなかつた)<sup>(5)</sup>。

ジェームズ・マッコーレとレオナ・エドワーズは、一九一二年四月一二日、どちらも二四歳で、パイン・レヴェルのマウント・シオンAME教会 (Mount Zion African Methodist Episcopal Church) で結婚式を挙げた。その直後に、彼らはアラバマ州タスキーギ (Tuskegee)<sup>(6)</sup> に移つた。<sup>(7)</sup>

パークスは、一九一三年二月四日に、ジェームズ・マッコーレとレオナ・エドワーズを両親として、タスキーギにて生まれた。パークスが二歳頃までタスキーギに住んでいた。その後、しばらくアベヴィル (ジェームズの実家) で過ごしたが、レオナは、パークスを連れて、パイン・レヴェルの自分の両親のもとに帰つた。<sup>(8)</sup>

以上においてわかるように、パークスは、父親の影響をほとんど受けることなく、成長した。それに対して、母親の影響を受けること、大なるものがあつた。たとえば、母親自身、教育の機会を有効に活用して、教員資格を取

得し、実際に教師になったように、パークスの教育にも関心をもち、パークスが教育を受けることを望んでいた。

## 2 ローザ・パークスの信仰と教会生活

パークスは、二歳のとき、AME教会（AME教会については後述する）で幼児洗礼を受けている<sup>⑧</sup>。パイン・レヴェルに戻ってからは、パークスは、おじが説教師（preacher）であったマウント・シオンAME教会で育った<sup>⑨</sup>。しかし、その当時のマウント・シオンAME教会は、財政上、第三日曜日だけ礼拝が行なわれていたので、第一、第二、第四日曜日は、バプテスト教会の礼拝に出席していた。しかし、パークスがAME教会の所属であることに変わりにはなかった<sup>⑩</sup>。一〇代になると、パークスは、モンゴメリーのセント・ポールAME教会に出席し、その教会の敬虔な信徒であった。

パークスの信仰の特徴は、その「純粋性」にあると言えよう。「神への信仰がパークスにとって疑問であったことは一度もなく、それは答えであった」という<sup>⑪</sup>。パークスが好きな聖書は、『詩篇』第二三編や第二七編であったという<sup>⑫</sup>。

また、パークスのもうひとつの信仰の特徴は、彼女が教会と絶えず固く結びついていたということであろう。彼女は次のように言っている。「私は、常に教会を強さの源泉としてきた。（中略）教会はいつも、私たちが神に安らぎと勇気を求めることのできる場所である。また、私たちを元気づけ、前進への力を与えてくれる。どこを旅しよう、私はいつも教会の礼拝に行くように努めている」<sup>⑬</sup>。

上述のように、教会がパークスの個人的（individualな）信仰に深く関わっていたのはもちろんであるが、教会は公民権運動とも深い関わりをもっていたと、パークスは認識している。当時、黒人が、合法的に集会し情報交換で

きた場所は、教会だけだったからである。教会こそが、当時、黒人共同体の基礎となる場所であったからである。<sup>(16)</sup> また、公民権運動の際、祈りはとても重要であったと、パークスは認識している。「モンゴメリー・バス・ボイコット運動の間も、私たちは、集会の前に必ず祈りをささげたものだった。デモ行進や、座りこみに参加する前にも、祈った」と、パークスは述懐している。<sup>(17)</sup>

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、次のように言っている。

ラウシエンブッシュ (Walter Rauschenbush, 1861-1918) を読んで以来、ぼくは、どんな宗教でも人間の魂を気づかうと称しながら、そうした魂をおびやかす社会や経済の状態に関心をいだかぬものは、いわば徒に葬りさられる日を待っているに過ぎない、精神的に死にかかった宗教だと、信ずるようになった。このことは、適切にも次のように語られていた。「個人とともに終わる宗教は滅びる (A religion that ends with the individual, ends.)」<sup>(18)</sup> ㄟ。

以上から言えることは、パークスは、神に対して素朴で純粋な個人的信仰をもっていると同時に、そこに留まらないで、公民権運動にも深く関わっていくようなラディカルな信仰ももっていたことである。パークスにおいては、その両面が葛藤を起こすことなく、調和していたと言える。

生涯を通してパークスが、AME (アフリカン・メソジスト監督) 教会の熱心な信徒であったことは、彼女を語る際、忘れてはならない重要なことである。キングは、生涯を通してバプテスト派であった。この違いは、意外に知られていない。ダグラス・プリנקリーは次のように記している。

生涯を通してパークスは、元奴隷のリチャード・アレン (Richard Allen, 1760-1831) が一八一六年にフィラデルフィアに創設したアフリカン・メソジスト監督 (AME) 教会の熱心な信徒であった。創立当初からAME教会は、『フリーダムズ・ジャーナル (Freedom's Journal)』を通して、議会に奴隷制の廃止を請願していた。(中略) ほどなく、会衆にはフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1817-1895) やハリエット・タブマン (Harriet Tubman, 1821-1913)、ソジャーナ・トゥルース (Sojourner Truth, 1797?-1883) らが参加することになる。(中略) その五〇年後、同教会が南北戦争後の南部のいたる所へと広がりを見せるのに合わせて、アラバマにおける最初のAME教会がモビール (Mobile) に建てられた。一九一三年のパークスの誕生時、教会は五〇万の信徒と七〇〇〇の教区を擁していた。<sup>19)</sup>

加えて、意外に知られていないことは、パークスが所属していたAME教会は公民権運動において重要な役割を果たしたことである。しかし、その事実はキングやラルフ・アバナシー (Ralph Abernathy, 1926-1990) がバプテスト派であったことにより、覆い隠されてしまった。<sup>20)</sup>

### 3 ローザ・パークスが受けた学校教育

一九一八年、パークス五歳のとき、初めて学校に行き始めた。<sup>21)</sup> パイン・レヴェルのその学校は、マウント・シオン・AME教会の庭の中にあった。その当時、教会の建物が学校として使われていたところもたくさんあったが、パークスの学校は教会の庭に校舎が別にあった。<sup>22)</sup>

パークスの母が、教員免許更新のため、モンゴメリーにあるアラバマ州立師範学校（現在のアラバマ州立大学）のサマースクールに通っていたときには、パークスはその学校のなかの実験学校（a laboratory school）に数週間通ったこともある<sup>(23)</sup>。

その後、パイン・レヴェルに戻るが、マウント・シオンAME教会の庭のなかにあった学校は閉鎖されていたので、パークスの母が教師をしていたスプリングヒル（Spring Hill）の教会の学校に、一一歳になるまで、通った<sup>(24)</sup>。

一九二四年、パークス一一歳のとき、「モンゴメリー女子実業学校（the Montgomery Industrial School for Girls）」に入学する。別名、「ミス・ホワイトの女子実業学校（Miss White's Industrial School for Girls）」としても知られていた。この学校は、「南北戦争が終わった翌年の一八六六年に創設された、他に類のない進歩的な教育機関（a uniquely progressive institution）だった」。「共同創設者の二人、アリス・L・ホワイト（Alice L. White）とマーガレット・ビアード（Margaret Beard）および教員は全員白人で、二五〇人から三〇〇人いた女子学生はすべて黒人だった」。この学校は、普通の科目（英語、理科、地理）もあったが、家政学（料理、裁縫、家庭管理、病人の看護の仕方）に焦点を当てていた。それは、ブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington, 1856-1915）の影響も受けた職業訓練的取り組み（a pragmatic vocational approach）であり、「ワシントンは、この学校の教育的戦略に心からの賛意を表明した」。またこの学校は、ブッカー・ワシントン流の職業教育とともに、厳格なキリスト教主義の学校でもあった。この学校でパークスが一番学んだことは、「自分は尊厳と自尊心をもった人間である（I am a person with dignity and self-respect.）」とうたうことであつた<sup>(25)</sup>。

ここで気づくことは、パークスの教育に、ブッカー・T・ワシントンの思想が大きく影響しているということである。換言すれば、パークスは、ワシントンの影響を受けて、成長していったという事実である。その最大の理由



は、マッコレー家（特に母親）が、ブッカー・T・ワシントンを尊敬していたからである<sup>(26)</sup>。それなのに、後で述べることになるが、パークスの公民権運動への参加の出発点とその過程は、徹頭徹尾、W・E・B・デュボイス（W. E. B. Du Bois, 1868-1963）がその創立に際して尽力した「全国黒人向上協会（N A A C P、すなわち、National Association for the Advancement of Colored People）」と共にあった。穏健派ワシントンと急進派デュボイスという、徹底的に異なる二人の思想と活動が、パークスという一人の人に流れ込み、受容されているのは、興味深いことである。

「モンゴメリー女子実業学校」は、スウェイン校（the Swayne School）（現ブッカー・T・ワシントン中学校）、セントニアル・ヒル高等学校（Centennial Hill High School）、州立黒人師範学校（the State Normal School for Colored Students）（現アラバマ州立大学）とともに、一九五〇年代の公民権運動の活動家たちを養成した<sup>(27)</sup>。

残念なことに、「モンゴメリー女子実業学校」は、パークスが八学年（中学二学年に相当）を終えた一九二八年に、閉校を余儀なくされた<sup>(28)</sup>。したがって、パークスは、九学年目をスウェイン校で、一〇学年と一一学年（高校一、二学年に相当）をアラバマ州立黒人教員養成大学付属教育実験学校（the laboratory school at Alabama State Teachers College for Negroes）で、学んだ<sup>(29)</sup>。結婚後の一九三三年にパークスは復学し、一九三四年二一歳のときに高校を卒業した<sup>(30)</sup>。

学校教育ではないが、パークスが参加する機会を与えられたハイランダー民衆学校（the Highlander Folk School）も、彼女を語る場合、とても重要である。この学校は、アメリカが大恐慌に襲われていた一九三二年に、マイルズ・ホートン（Myles Horton）によって、開校された。ホートンは、「社会的福音（Social Gospel）」の信奉者であり、教師であり、「産業別労働組合会議（CIO、すなわち Congress of Industrial Organizations）」の組織者でもあった<sup>(31)</sup>。

一九五〇年代になると、この学校は、将来のリーダーを養成し、その人たちが郷里に帰ってからこの学校で学んだことを生かして、変革 (change) をもたらしうることができるようなセミナーを行なった。<sup>32)</sup>

ヴァージニア・ダー (Mrs. Virginia Durr)<sup>33)</sup> が、パークスに、テネシー州モンテীগル (Monteagle) にあるこの学校の、「人種隔離の撤廃——最高裁判決を実施するには (Racial Desegregation: Implementing the Supreme Court Decision)」を討議する研修会に参加することを薦めた。<sup>34)</sup> 一九五五年、四二歳のパークスは、ハイランダーで、一〇日間、人種や生育環境の異なる人たちと一緒に共同生活をしながら、人種隔離撤廃に関するセミナーに参加した。<sup>35)</sup>

研修会の最後に常問われることは、「ところで、あなたは、(自分の町に) 戻ったら、何をしますか、何ができますか」という問いであった。この問いは、「個人の変容から、社会の構造変革につなげる」鍵となる問いである。<sup>36)</sup> パークスは、その講義ノートに、「人種統合への最初の一步は、誰に向けて行動が起こされるべきなのだろうか」との問いに対して、「それは教会にである」と答えている。<sup>37)</sup> パークスのこの答えは、興味深い。筆者は既に、「教会がパークスの個人的信仰に深く関わっていたのはもちろんであるが、教会は公民権運動とも深い関わりをもっていたと、パークスは認識している」と、「ローザ・パークスの信仰と教会生活」のところで述べた。この指摘とパークスの答えは、みごとに符合していると言える。

#### 4 ローザ・パークスの結婚

一九三二年二月一八日、パークス一九歳のとき、レイモンド・パークス (Raymond Parks, 1903-1977) と結婚する。レイモンド・パークスは、一九〇三年二月一二日、アラバマ州ウェドウィー (Weddowee) で生まれた。学校教育は、ほとんど受けたことがなかった。肌の色が白く、モンゴメリーのダウンタウンの黒人専用理髪店で、理髪師

として働いていた。<sup>(38)</sup>

レイモンド・パークスは、NAACPのモンゴメリー支部の創立メンバーの一人であり、パークスと知り合う前から、NAACPに所属していた。具体的には、選挙登録運動に関わっていた。<sup>(39)</sup>

一九五一年、パークス一家は、センチニアル・ヒル (Centennial Hill) を出て、モンゴメリーの貧民区にあるクリーヴランド・コート公営住宅 (the Cleveland Courts housing project) の、小さな六三四号室に移り、デトロイトに移るまでそこで夫レイモンドと母レオナと共に住んだ。<sup>(40)</sup>

## 5 ローザ・パークスの公民権運動への参加

パークスの公民権運動への参加は、NAACPにおける活動を通してであった。NAACPは、一九〇九年二月一二日に、黒人の地位を向上させることを目的にする黒人と白人の小さなグループにより設立された組織で、ニューヨークに本部をもっていた。具体的には、人種偏見、リンチ、残虐行為、教育の不平等などに反対する活動をしていた協会である。<sup>(41)</sup>

パークスは、一九四三年一二月に、NAACPに入会した。<sup>(42)</sup> 同時に、NAACPのモンゴメリー支部の書記に選出された。<sup>(43)</sup> 支部長は、E・D・ニクソン (E. D. Nixon) であった。ニクソンは、一九四七年にはNAACPの州レベルの長 (state president) となった。<sup>(44)</sup> ただし、一九五〇年代初期にはモンゴメリー支部長を辞任していた。<sup>(45)</sup>

その当時、NAACPのモンゴメリー支部の活動は、主として投票権獲得と市バスの隔離撤廃 (voting rights and desegregation of the city buses) であった。<sup>(46)</sup> パークス自身、一九四三年に二回、登録を試みる。一九四四年にも登録を試みる。一九四五年、三二歳のとき、やっと選挙登録することができた。<sup>(47)</sup> バスに関する人種隔離反対運動に関し

ては、一九五五年一月一日がパークスの最初の反対運動ではなく、パークスは既に、一九四三年、モンゴメリー市のバスから降ろされるという経験をしていた。<sup>48</sup>

一九四八年にモビールで行なわれたNAAACPの州大会では、パークスは、「聖書とブッカー・T・ワシントンを引用して」、演説を行なっている。<sup>49</sup>

一九四八年、パークスは、NAAACPのモンゴメリー支部書記に加えて、州会議の書記にも任命された。しかし、一九四九年五月に、モンゴメリー支部書記を辞している。けれども、一九五二年初頭には、モンゴメリー支部書記に復帰している。一九四九年、パークスは、NAAACPの「青年部会 (Youth Group)」の顧問になっている。<sup>50</sup>

これまで述べてきたことをもとにすれば、以下のことは記憶するに値することであろう。パークスは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアに出会ったということである。パークスの公民権運動の最初の時期の活動は、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアではなく、ニクソンとともにあった。このことは、重要なことである。(非暴力抵抗によって公民権運動を進めていくことは、キングによってもたらされたものであつて、ニクソンやパークスによって生み出された思想や運動ではなかった)。

## 6 マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの出会い

パークスとマーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの初めての出会いは、実は、モンゴメリー・バス・бойコット運動が始まるよりも前であつた。それは、一九五五年八月一四日であつた。プリンクリーは、次のように記している。

八月一四日、パークスは、メトロポリタン合同メソジスト教会(the Metropolitan United Methodist Church)で開かれたN A A C Pの会議に参加して、希望を甦らせる。その日パークスは、将来公民権運動において、彼女よりも有名になる数少ない人物マーティン・ルーサー・キング・ジュニアと初めて出会う。(中略) その夜、キングがおこなった演説は、「ブ、ラ、ウ、ン、判決 (the Brown decision)」であった。(中略) パークスは、「わたしには、『キング』牧師が、黒人の指導者となる覚悟を決めているように思えた」、「わたしは、牧師の雄弁さに深い感銘を受けた」との印象を示している<sup>⑤</sup>。

キングとパークスとの最初の出会いについては、これまでの研究においてほとんど注目されなかったけれども、パークスが、実際のモンゴメリー・バス・ボイコット運動が始まる前から、キングにポジティブな印象をもっていたことは、その後のボイコット運動を成功させるうえで重要なことであつたと言っても言い過ぎではないだろう。数日後、パークスは、キングに手紙を書いている。その内容は、N A A C Pの役員会に入つてほしいこと、次回の会合に出席してほしいこと、の依頼であつた。残念ながら、キングには先約があつた<sup>⑥</sup>。

### 三 おわりに

キングとE・D・ニクソンや、キングとラルフ・アバナシーとの関係と違って、キングとパークスは、生涯信頼の気持ちを持ち続けた。しかし、キングに出会うまでのパークスの人生をたどることによってわかつたことは、育つた家庭環境にしても、信仰と教会生活にしても、受けた学校教育にしても、公民権運動への参加のしかたにお

いても、両者は意外と異なっていたという事実である。育った家庭環境に関して言えば、パークスは、父親の影響をほとんど受けることなく、成長した。それに対して、母親の影響を受けること、大なるものがあつた。信仰と教会生活について言えば、パークスは、神に対して素朴で純粋な個人的信仰をもっていたと同時に、そこに留まらないで、公民権運動にも深く関わっていくようなラディカルな信仰ももっていたことである。パークスにおいては、その両面が葛藤を起こすことなく、調和していた。また、生涯を通してパークスが、AME教会の熱心な信徒であつたことは、彼女を語る際、重要なことである。キングは、生涯を通してバプテスト派であつた。この違いは、意外に知られていない。受けた学校教育ということで言えば、パークスの教育に、ブッカー・T・ワシントンの思想が大きく影響していたことである。換言すれば、パークスは、ワシントンの影響を受けて、成長していったという事実である。その最大の理由は、マッコレー家（特に母親）が、ブッカー・T・ワシントンを尊敬していたからである。それなのに、パークスの公民権運動への参加の出発点とその過程は、徹頭徹尾、W・E・B・デュボイスがその創立に際して尽力した「全国黒人向上協会（NAACP）」と共にあつた。穏健派ワシントンと急進派デュボイスという、徹底的に異なる二人の思想と活動が、パークスという一人の人に流れ込み、受容されたことは、興味深いことである。公民権運動への参加のしかたに関して言えば、パークスは、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアに出会う前に、ニクソンに出会っていたということである。NAACPにおける、パークスの公民権運動の最初の時期の活動は、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアではなく、ニクソンとともにあつた。だから、その後非暴力抵抗によって公民権運動が進められていったのは、キングの思想によるものであつて、ニクソンやパークスによって生み出された思想や運動ではなかつた。後年、パークスが、キングの非暴力抵抗に理解を示しながらも、マルコムXへの親近感を捨て切れなかつた理由のひとつは、そこにあると言ってもよいだろう。<sup>83</sup>

注

- (1) 猿谷要「アメリカ社会変革の起爆剤」『ローザ・パークス』ダグラス・プリנקリー著 中村理香訳、岩波書店、二〇〇七年、二六四—二六五頁。
- (2) Martin Luther King, Jr., *Stride Toward Freedom: The Montgomery Story* (New York: Harper San Francisco, 1958), 152; マーティン・ルーサー・キング『自由への大いなる歩み—非暴力で闘った黒人たち—』雪山慶正訳、岩波新書、一九五九年、一九三—一九四頁。
- (3) Douglas Brinkley, *Rosa Parks* (New York: A Lipper/Viking Book, 2000), 23-24; ダグラス・プリנקリー『ローザ・パークス』中村理香訳、岩波書店、二〇〇七年、二四—二五頁。
- (4) Rosa Parks, *My Story* (New York: Puffin Books, 1992), 5, 10; ローザ・パークス『ローザ・パークス自伝』高橋朋子訳、潮出版社、一九九九年、五頁、九頁。
- (5) *Ibid.*, 19; 高橋訳、一八頁。
- (6) タスキーギは、その当時人口三〇〇〇人で、ブッカー・T・ワシントンの名声によって、黒人知識人の拠点となっていた。ブッカー・T・ワシントンについては、本文中で後述する。Brinkley, 16; 中村訳、一七頁。
- (7) *Ibid.*, 15; 中村訳、一六頁。
- (8) Parks, *My Story*, 9; 高橋訳、九頁。
- (9) Rosa Parks, *Quiet Strength* (Michigan: Zondervan Publishing House, 1994), 54; ローザ・パークス『勇気と希望』高橋朋子訳、サイマル出版会、一九九六年、八九頁。Brinkley, 14; 中村訳、一五頁。恐らく、タスキーギにあったAME教会であろう。
- (10) Brinkley, 21; 中村訳、二二頁。
- (11) Parks, *Quiet Strength*, 54; 高橋訳、九〇頁。
- (12) Brinkley, 37; 中村訳、四〇頁。
- (13) *Ibid.*, 14; 中村訳、一五頁。
- (14) Parks, *Quiet Strength*, 55, 57; 高橋訳、九二頁、九五頁。

- (15) Ibid, 70: 高橋訳 一一三—一四頁。
- (16) Ibid, 30-31: 高橋訳 五〇—五一頁。
- (17) Rosa Parks, *Dear Mrs. Parks: A Dialogue with Today's Youth* (New York: Lee & Low Books Inc., 1996), 62-63: ローザ・パークス『ローザ・パークスの青春対話』高橋朋子訳、潮出版社、一九九八年、七八—七九頁。
- (18) King, Jr., 91: 雪山訳 一〇七頁。次も参照のこと。Clayborne Carson, ed, *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.* (New York: Warner Books, 1998), 18: クレイボーン・カーソン編『マーティン・ルーサー・キング自伝』梶原寿訳、日本基督教団出版局、二〇〇一年、三四頁。
- (19) Brinkley, 13: 中村訳、一四頁。現在、AME教会は、約五百万人の信徒と約九千人の教職者がある。大宮有博『アメリカのキリスト教がわかる』キリスト新聞社、二〇〇六年、一〇四頁。
- (20) Brinkley, 75: 中村訳、七二頁。
- (21) 五歳か六歳か、正確なところはわからない。
- (22) Parks, *My Story*, 24: 高橋訳、二五頁。
- (23) Ibid, 41: 高橋訳、四四頁。
- (24) Ibid, 41: 高橋訳、四四頁。
- (25) この節に関しては、以下をもとにしてまとめた。Parks, *My Story*, 42, 48, 49: 高橋訳、四五頁、五二頁。Brinkley, 28, 29, 34: 中村訳、三〇頁、三二頁、三六頁。
- (26) Brinkley, 18, 32: 中村訳、一九頁、三五頁。
- (27) Ibid, 30: 中村訳、三二頁。
- (28) Parks, *My Story*, 50: 高橋訳、五三頁。Brinkley, 35: 中村訳、三八頁。
- (29) Parks, *My Story*, 53: 高橋訳、五七頁。Brinkley, 36: 中村訳、三八—三九頁。
- (30) Parks, *My Story*, 64: 高橋訳、七〇頁。Brinkley, 41-42: 中村訳、四四頁。正確な年数と年齢は、実のところ、はっきりしない。
- (31) Brinkley, 91: 中村訳、九六頁。



- (32) Parks, *My Story*, 103 ; 高橋訳、一一七頁。
- (33) パークスが彼女に会ったのは、一九五四年のことであった。彼女は、バーミングハムで生まれ育った白人女性で、弁護士の方とともに、黒人の人種差別撤廃のために働いた。 Parks, *My Story*, 95 ; 高橋訳、一〇九頁。
- (34) *Ibid.*, 101 ; 高橋訳、一一四頁。 Brinkley は 'Racial'ではなくて 'Radical'という語を使っている。 Brinkley, 91 ; 中村訳、九五頁。
- (35) Parks, *My Story*, 106 ; 高橋訳、一一八頁。 パークスは、その後一九五六年八月と一九五六年一二月初旬にも、ハイランダー民衆学校を訪問している。 Brinkley, 166, 168 ; 中村訳、一七五頁、一七八頁。
- (36) 藤村好美「ハイランダー・フォークスクールにおける変容的学習の展開——ローザ・パークスに見る社会変革への学びについての考察——『教育科学』二六号、二〇〇五年、一〇七一—一二三五頁。
- (37) Brinkley, 95 ; 中村訳、一〇〇頁。
- (38) Parks, *My Story*, 55, 57 ; 高橋訳、六〇頁、六二頁、六三頁。
- (39) Brinkley, 38 ; 中村訳、四一頁。 Parks, *My Story*, 60, 71 ; 高橋訳、六六頁、八〇頁。
- (40) Brinkley, 2, 85 ; 中村訳、二頁、九〇頁。
- (41) Parks, *My Story*, 80 ; 高橋訳、九二頁。 次も参照のこと。 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波新書、一九九一年、一五四—一五七頁。
- (42) Brinkley, 48 ; 中村訳、五〇頁。
- (43) Parks, *My Story*, 81 ; 高橋訳、九三頁。
- (44) Brinkley, 68 ; 中村訳、七一頁。 中村訳では、「州の支部長」となっているが、「州の長」が適訳であろう。
- (45) Parks, *My Story*, 94-95 ; 高橋訳、一〇八頁。
- (46) Brinkley, 54 ; 中村訳、五六頁。
- (47) Parks, *My Story*, 73 ; 高橋訳、八三頁。 Brinkley, 56 ; 中村訳、五八頁。
- (48) Parks, *My Story*, 76 ; 高橋訳、八七頁。
- (49) Brinkley, 69 ; 中村訳、七二頁。

- (50) Ibid., 69, 71, 73 ; 中村訳 七二頁、七四頁、七六頁、七七頁。
- (51) Ibid., 99-100 ; 中村訳 一〇五頁。
- (52) Clayborne Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr.* Vol. II (Berkeley: University of California Press, 1994), 572. Brinkley, 100 ; 中村訳 一〇五頁。
- (53) Ibid., 191-93 ; 中村訳 二〇二―二〇四頁。